

## はじめに

中国史上、その政治的中心地はほぼ黄河流域にあり、そこは序章に述べた淮河以北の畑作地帯に属する。長安・洛陽・開封・北京など歴代の首都はここにあり、その後背地域は、二章で述べる華北乾地農法の地域であった。中国農業はこの乾地農法から出発しているので、いわば中国農業史の基本であり、出発点である。本来なら、本書はこの畑作農業の話題から出発すべきなのだろうが、私も含めた、日本人の頭のなかでは畑作に対してもあまりイメージがわからない。中国では栽培穀物の主体がアワからコムギに変化していったのだが、いまの日本でコムギ栽培地は多いものの、アワを栽培しているところはかなり少ない。そこで比較的身近なイネの話題から話を始めることとした。

畑作についてひとと書いておくと、日本で畑作の評価が低いのは、近世の畑作中心主義の影響である。そのため畑作穀物のコムギやアワなどは主穀ではなく「雜穀」と称して軽んじられてきた（木村茂光編『雜穀』I・IIなど）。歴史的には縄文時代の末期に畑作農業が先行しておこなわれることとした。

れていたが、畑作が定着した弥生時代以降にその地位が逆転してしまった。日本の農業は畑作がベースにあったという証拠の一つは民俗学の研究で紹介されている。国内のいくつかの地域で「モチなし正月」の習俗が残っているというのである（坪井洋文氏『稻を選んだ日本人』など）。現在、正月にモチを食べて祝うのは一般的な風習となっているが、その地域では正月にモチを食べるのはタブーだという。民俗学では、それが畑作伝来以前の畑作時代の名残であると考えている。畑作に征服された畑作の怨念のようなものが感じられる習俗である。

それはともかく、現代の日本人にとって畑作は農業の主役であるかのようにみなされている。秋が近づくとその年のコメのでき具合が予想され、味の良さのランクが話題になる。うまいと評価されたブランド米は高価格で取引され、食欲をそそるニュースが流される。また水田の広がる風景が私たちの身近にあることはいうまでもないし、田植や稻刈りなど畑作作業についてもそれなりの知識が広がっている。ただ、時おりテレビのレポーターが水田地帯に行って、自然がいっぱい！などと叫んでいるのには閉口するけれど、水田が人工物の最たるものだなどとは夢にも思っていないのだろう。

こうした畑作をめぐる情景は歴史的に作りあげられてきたものだ。たとえば江戸時代の関東平野には畑作地帯が広がっていた。平坦な火山灰層である関東ロームでは灌漑用水を手に入れるのが困難で、むしろ畑作の方が有利だったためである。しかし江戸幕府は畑作を中心主義を取り、畑作を評価しなかった。こうした政策が浸透し、人々の意識も畑作一辺倒になってしまった。だ

が稻作発祥の地である中国では異なる情景もある。それは本書でおいおい述べてゆくが、中国の稻作をめぐる歴史をみるとことで日本の稻作を客觀化することもできるようになる。これから中国農業史の話題を繰り広げるきっかけとして、まず稻作を取り上げる理由のひとつはそこにある。とすれば最初の話題は稻作をめぐる「イロハのイ」を確認することである。

## 一 コメの品種をめぐって

まず確認しておきたいのは私たちが日ごろ使うコメという言葉について。本書では稻・イネとコメを使い分けるが、一般には両方とも同じ意味に使われている。だが「米」という文字の本来の意味は「穀物の実」すなわち粒摺りした穀物の中身である。たとえばアワであつても粒摺りした中身は「米」なのだ。けれども日本では粒摺りしたイネの実を米＝コメとよんできた。それだけ穀物といえばイネだという認識が定着しており、コメ、なかでも白米が主穀でその他の穀類は、赤米のイネも含めて雑穀なのであった。これは日本の歴史に規定されてきた呼称である。

このコメについて私たちはどれだけ知っているのだろう。まずコメの品種にどんなものがあるかを述べておきたい。「はじめに」でも触れたが、スーパーなどのコメ売り場に行くと、コシヒカリだのナナツボシだのといふさまざまな名前の付いたコメが売られている。これらのコメには日本穀物検定協会が発表する食味のランキングがつけられ、その価格に大きな差がついている。ではこうした名前が品種かといえばそうなのだが、ブランド名にもなっている。大槻の品種名でいえばこれらはアジア種のなかのジャポニカ種であり、付け加えればその品種の水稻（陸稻ではない）で、早稲（わいざい）か、中稲（なかい）か、晚稲（おくれい）かの白米（赤米ではない）である。最近の農学の研究ではこうした区別

### 三 田植の始まり

中国で早くから田植をおこなっていたことは、いくつかの史料からうかがうことができる。それらの記事は先の拙著『妻と娘の唐宋時代』に、女性も子供も参加する労働の例として引用しておいた。そこでとくに触れなかつた記事があるので紹介しよう。南宋時代（一二二七～一二七九年）の洪邁著『夷堅志』という、不思議な話の書きを収めた本に次のような話が載つている。

紹熙二（一一九二）年春、（現江西省撫州）金溪県の民・吳廿九は田植をしようとしていた。その母からいま着ている黒い綿袍（『防寒・寝具とする綿入れ』）を借りようとしていた。「明日は田植なので〔綿袍〕質に入れて錢を借り、雇用人の労賃と食費にあてたいのだが」と。母がいう。「私は春の寒さがこわいし、明日から春に着る、裏地をつけた着物」をもつていてのにどうしてそれを取り上げないのだい」と。吳は怒ったが引き下がつた。……

（『夷堅志』卷四「吳廿九」）

これは呉廿九という親不孝息子が天罰を受ける話であり、終章でも詳しく取り上げる。それ

はともかく彼は人を雇つて田植をおこなうため、母親の綿入れの着物を取り上げようとした。それを質入れして、お金を手に入れ、労賃・食費にあてようとしたのだ。ということは日本の田植のやり方とはまったく違つていて、村人が助け合うのではなく、水田の所有者個人が労働者を雇つて田植をおこなうのである。ここには村人の共同体としてのつながりがみえず、村落共同体は存在していない。だから助け合いも村の撫もないし、当然、村八分のような罰則もない。この点が日・中両国の農村社会の大きな違いである。

ともあれ南宋時代には、人を雇つてもおこなわねばならない田植作業が定着していた。稻作作業の重要な一環として理解されていたといえる。ではこうした田植作業の開始時期はどれほど時間を探ることができるのだろうか。

南宋より前の唐代の小説史料の記事は前掲の拙著で紹介したが、現在の江蘇省で史氏の娘が一人で田植をしていた、という簡潔な記事であった。「田植」と訳した原文は「蒔田」で、田植の意味だと解釈できるが、種蒔きの意味にもとれる。ただ主人公の娘がこの作業で疲れていたと書かれているので、おそらく一人で重労働の田植作業に従事していたのであろう。種蒔きではさほど労働にはならない。この記事は、南唐から北宋初めの高級官僚であった徐鉉の著書『稽神錄』から『太平廣記』に転載されたものであった。この記事が書かれた時期は唐代末期から十国・南唐時代（九～一〇世紀）だと思われる。

また唐代後半期（八・九世紀）の詩の何篇かには「播秧」「移秧」などの表現で田植が詠まれている。